

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370940

研究課題名(和文) 移住開拓島に構築される生業体系に関する民俗学的研究 定住化と無人島化の事例比較

 研究課題名(英文) Ethnological-Japanological Study of the subsistence-system in the island
 constructed by emigration in modern times-comparing with a sustainable system
 and a non-sustainable system

研究代表者

野地 恒有 (NOJI, TSUNEARI)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60242898

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：近代以降に移住者の開拓によってその集落が形成された島において、定住化のための「持続する生業体系」の特徴について調査研究した。その結果、周辺社会との間に張りめぐらされた海縁ネットワークにより定住生活は持続され安定されること、移住先の定住生活を成立させる生業体系とは外部との海縁ネットワークの体系であること、その海縁ネットワークを作り出すその島独自の(ほかの地域に依存しない)生業手段・技術が必要であること、などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：I analyzed ethnological-Japanologically the subsistence-system in the island constructed by emigration in modern times in Japan, comparing with a sustainable system and a non-sustainable system. As a result, I clarified the next 3 points.
 1.The domiciliation life is sustainable by the maritime network.2.The subsistence-system for domiciliation is that of the maritime network with neighboring societies.3.For the sustainability of the domiciliation, they(emigrants) must create networks by the island original subsistence-technology.

研究分野：文化人類学・日本民俗学

キーワード：移住 海縁ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

本研究課題に掲げた移住開拓島とは、近代以降に移住者の開拓によってその集落が形成された島のことである。従来、民俗学では、何代も一定の地域に住み続けてきた人びとの、その居住地域内で営まれてきた固定的な定住生活を基本とする研究が主流を占めてきた。それに対して、本研究では、移住により形成された流動的な社会のもつ文化的特徴の解明をめざしている。

もちろん、人の移動や移住を対象とした研究はこれまでもなされている。たとえば、出身地で保持していた文化事象が移動・移住先にどのように伝えられ変容するかといった研究や、出稼ぎという活動が出稼ぎ出身地の生業の中にどのような位置を占めているかといった研究などがある。しかし、こういった研究は出身地の文化を基準として移動・移住をとらえているのに対して、本研究がそれらのもとは大きく、そして決定的に異なっているのは、本研究では、出身地側ではなく移住先の側に立って、いろいろな地域からの人たちが集住する移住社会には独自の文化が形成されるととらえ、移住先に定住生活形成されていく実態の中から伝承的な特徴や民俗性を引き出そうとしている点である。

一方、本研究の主な調査地である瀬戸内諸島では、よそに出て行く出稼ぎや海外移民といった移動労働に関する研究はこれまで多くなされてきたのに対して、瀬戸内諸島の中に入ってくる人たちにより形成された社会の研究はほとんどなされてこなかった。もっとも、瀬戸内海における移住社会の研究については宮本常一の決定版ともいえる研究(宮本常一『瀬戸内海の研究 島嶼の開発とその社会形成 海人の定住を中心に』、未来社、2001)があるが、それは近世以前の社会を対象としたものである。本研究の調査対象である明治時代以降に形成された移住開拓島の定住生活構築に注目する調査研究はなされてこなかつ

た。

さらに、研究代表者はこれまで移住社会の研究では定住化に成功し持続している事例を対象としてきたのに対して、定住化に失敗し無人島化した移住開拓島の事例も取りあげて、その定住生活途絶していった過程を定住化に成功した事例と比較研究することにより、逆に、定住生活が持続し確立するための要因や特徴をとらえることができるのではないかという着想に至った。本研究では次の2点が、それまでおこなってきた研究とは大きく異なり発展させた視点である。第1に、無人島化した移住開拓島を対象として、その定住生活の途絶過程に注目する。無人島化とは定住化の対立語であり、移住開拓島における定住生活の途絶のことを指している。過疎化のことではない。第2に、移住後に構築される生活を、生業体系として全体的にとらえる。生業体系とは、生活維持のために営まれる経済的・非経済的活動の総体のことである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1960年代に無人島化した移住開拓島を取りあげその生業活動の途絶過程を明らかにしつつ、定住化に成功した移住開拓島の生業活動と比較研究することによって、移住後に構築される持続可能な生業体系とその特徴を明らかにすることである。さらに、その結果をふまえて、従来の民俗学研究を再検討することである。

3. 研究の方法

本研究では現地調査の実施が中心となる。現地調査の方法は、聞き取り・参与観察と文献資料収集である。

調査においては、移住開拓島を定住化・無人島化に対比させて、移住後に構築される生業活動を持続する生業体系・途絶する生業体系に対比させて進める。

4. 研究成果

(1) 海縁ネットワークの提示

移住開拓島とは、海縁ネットワークによって維持された社会 = 海縁ネットワーク社会のことであると結論づけた。

海縁ネットワークは海のえにしによって作り出されるネットワークである。海にかかわる人やモノの移動によって作り出される関係である。ネットワークに「海縁」を冠するのは、土地に基づく関係の地縁や血筋に基づく関係の血縁に対立する言葉として明示させたいからである。移住社会は、血縁や地縁とは異なる、海を軸として広範囲に多方面に向かって作り出されてきた海縁ネットワークが重要な役割を果たしているのである。また、この関係は沿岸部だけのことでなく、内陸部との関係も含まれるので、海縁の意味するところは沿岸や海域とも異なる。

(2) 海縁ネットワークを作り出すもの 股島と小手島

無人化した移住開拓島の股島（香川県観音寺市）に関する現地調査では、とくに、伊吹島（観音寺市）の港に祀られているエビス神社の船祭りに注目した。この祭りは、エビス神社の神体を船に乗せて伊吹島の周辺や二つの無人島に上陸するというものである。その無人島の一つが股島である。この祭りに随行して股島に上陸して、股島の移住者宅跡や小祠などを確認した。また、伊吹島において股島に関する聞き取り調査をもおこなった。

その結果、次のことが明らかになった。定住生活を構築するための海縁ネットワークは、自力で他に依存せずに生産あるいは発信できるものによって作り出されなければならないのである。

定住化に成功した移住開拓島の小手島（香川県丸亀市）は、タコ漁を通じて、その海縁ネットワークを自力で、手島をはじめ周辺地

域に依存せずに作り出すことができた。一方、無人島化した移住開拓島の股島は、シラス漁において、伊吹島に依存しなければ生産できなかったため、定住生活を安定させるための海縁ネットワークを自力で作리出すことはできなかった。

移住後に構築される生業体系について海縁ネットワークという観点からまとめると、移住先の定住生活を成立させる生業体系とは外部との関係で構築された海縁ネットワークの体系のことである。定住生活を持続させ安定させるのは、周辺社会との間に張りめぐらされる多様な海縁ネットワークによるものである、という結論を得た。

海縁ネットワークから『海上の道』の検討
移住開拓島論の成果をふまえて、移住後の生活構築・微史・海縁ネットワークの観点から柳田国男の著作『海上の道』を検討した。

海上の道とは日本文化の起源に通ずる道のことではなく、海縁ネットワークのことであるととらえなおした。そして、柳田の『海上の道』の中で原日本人を引き付けたタカラガイ論について、次のように再解釈した。

タカラガイとは海縁ネットワークを作り出すものを象徴的にあらわした言葉である。象徴としてのタカラガイは、海縁ネットワークを形成させるものを意味している。タカラガイでなくとも何ものかにより、海縁ネットワークが形成されることによって定住生活は成立するのである。柳田の言うタカラガイの力とは海縁ネットワークを作り出す力のことであると言いかえられる。

そして、定住化の成功とは、柳田の言う自給自足社会の成立ではなく、海縁ネットワーク社会の成立のことである。移住先の定住生活を成立させるのは、外部との関係で構築された海縁ネットワークである。定住生活を安定させるのは、周辺社会との間に張りめぐらされた多様な海縁ネットワークによるもの

である。これが本研究の結論として提示した定住モデルである。

石炭・カツオ節・トビウオ

定住生活を構築するための海縁ネットワークは、自力で他に依存せずに生産あるいは発信できるものによって作り出されなければならない。そのような海縁ネットワークを作り出すものとして、石炭、カツオ節、トビウオを抽出して、従来の民俗学研究を検討した。

海縁ネットワークを作り出すものという意味において、石炭もタカラガイと同じである。「軍艦島」と呼ばれている長崎市の端島は、石炭が作り出した海縁ネットワークによって成立した移住開拓島である。石炭は海縁ネットワークを作り出し、無人島であった端島を軍艦島という巨大な産業都市の島としたのだ。ただ、その島の海縁ネットワークを支えたのは唯一石炭だけであったため、石炭がその力を失うと、途端にその島は廃墟となった。1974年に無人島となった軍艦島は、今や、日本でもっとも有名な無人島化した移住開拓島である。海縁ネットワークを作り出すものは複数あった方が、移住開拓島の定住生活をより安定させ持続させることになる。

柳田国男の「青ヶ島遷住記」(『島の人生』)を海縁ネットワークから検討した結果、東京都青ヶ島では、カツオ節がいわばタカラガイであるということが出来る。青ヶ島では、カツオ節製造により、自力で他に依存せずに海縁ネットワークを作り出すことができた。それに対して、青ヶ島の絹製品は八丈島に依存しなければ生産できなかった。カツオ節によって、青ヶ島では遷住生活を安定させるための海縁ネットワークを作り出すことができたのだ。

考古学・民族学の国分直一は、巨史的な立場から、移動を導く生物を想定して 海上の道 論を民族起源論として展開した(『環シ

ナ海民族文化考』慶友社、1976など)。しかし、トビウオを例に取ってみると、研究代表者の調査や管見によれば、これまで国分がくり返し述べてきたようなトビウオを追いかけた結果、移住が引き起こされたという移動を導く生物としてのトビウオの事例を見出すことはできなかった。

本研究では国分の 海上の道 論に対して、微史的な立場から、外部と結びつける生物、媒介とする生物という観点への転換を提起した。つまり、外部と結びつける生物、媒介とする生物としてのトビウオである。それについて説明しよう。1960年頃に山口県見島を訪れた宮本常一は次のような聞き書きを載せている。

「かつての大和の売薬商人がこの島にやって来たとき、アゴ〔トビウオの方名〕を見て、大和ではこれがなくては盆がすごせぬと言ったので、見島の人たちは自分らのとった魚が遠く大和山中で食べられていることを知っておどろいたという。」(宮本常一「見島の漁村」『宮本常一著作集』17、未来社、1974)

1920年代の頃、見島のトビウオは大阪の仲買によってさかんに買われていたり、トーカーセンという運送船で大阪に運ばれて行き、他方、近畿地方の山間部では、盆にはトビウオを贈答品としたり食べたりしていた(瀬川清子『日間賀島・見島民俗誌』未来社、1975など)。トビウオによって見島と近畿地方が結びつけられているのである。これが、外部と結びつけ、媒介とする生物というとらえ方である。つまり、トビウオは海縁ネットワークを作り出す生物と言いかえることができる。

(3) 海縁ネットワークがもたらす負の要素

瀬戸内海では移住開拓島の定住生活において、ネズミが大きな被害をもたらした。島と周辺地域との行き来が頻繁になればなるほど、つまりさまざまな海縁ネットワークに

よってネズミも入ってくる。定住生活を支える海縁ネットワークは、当然、負の流入物ももたらずのである。定住化の成功のために海縁ネットワークの形成は必須であるけれども、同時にそれはネズミのような負の移入ももたらずのである。海縁ネットワークの形成は、移住社会の定住化に対してプラスとマイナスの諸刃の剣なのである。

移住開拓島が外社会とつながることは、定住生活の持続のために必須であるけれども、同時にそれは外来の侵入者（ネズミや海賊など）をももたらず。海縁ネットワークの形成は、移住開拓島にとってプラスとマイナスの移入物をもたらず。だからといって、マイナスの移入物だけを遮断することはできない。そうした海縁ネットワークがもたらずアンビバレントな状況が移住開拓島の定住生活における不安なのである。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

野地恒有、まれびと＝海縁ネットワーク論序 折口信夫『古代研究 民俗学篇』を題材として、歴史研究、査読あり、61・62 合併号、2016、87 - 92

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

野地恒有、海上の道＝海縁ネットワーク論その2 移住開拓島の民俗学ノート（5）、日本文化論叢、査読なし、24号、2016、59 - 68

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

野地恒有、海上の道＝海縁ネットワーク論その1 移住開拓島の民俗学ノート（4）、日本文化論叢、査読なし、23号、2015、57 - 67

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

〔図書〕（計1件）

野地恒有、自刊（愛知教育大学野地研究室）移住開拓島の民俗学新訂版、2017、86

6．研究組織

(1)研究代表者

野地 恒有（NOJI TSUNEARI）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60242898